

「まちのエンタメ公民館」 として人が集まる場所に

柴田 達人 さん

裕子 さん

Shibata Tatsuto/
Yuko



共同代表の二人。イコマ ローカル ビジネス ハブ卒業生。併設の「まめカフェ」はカフェ利用だけでも、裕子さんこだわりの挽きたてコーヒーなどが味わえる。

生 駒駅近くにある、とある一軒家。コーヒーの香りが漂うおしゃれなカフェだが、奥の扉に秘密がある。扉の先には、大きなスクリーンにふかふかの椅子。好きな映像作品を持ち込めば、大画面に10個のスピーカーを備えた音響設備で鑑賞できる空間が広がる「MYプライベートシアター いこまめ座」だ。

「家のテレビとの大きな違いは、『音響』だと思います。昔の作品を再び観て『こんなに泣ける映画だったんだ』と言っていたことも。映画が持つ、人の心を動かすパワーを引き出せたのかなと思いました」と達人さんは話します。

夫 婦ともに元・電鉄社員。退職を1年後に控え、後の暮らし方を2人で考えていた。「社会に貢献できる活動をしたい」と考える達人さん。けれど、好きなことでないと続けられないと感じた。脳裏をよぎったのは、映画と、何度か足を運んだ奈良市にある「ならまちシアター 青丹座」。「これがやりたい」。実現に向けて、夫婦で歩き始めた。

物件探しや開業の知識を得るために、夫婦で市の空き家セミナーと創業スクールに参加。「シアターへのつなぎの空間を作りたい」と思い、裕子さんはカフェ開業のセミナーなどにも参加した。

シアターのプロデュースは「青丹座」の運営会社に依頼し、今年の4月にオープン。直前の名作上映会は、近所の人などで満席になった。二人は当時を振り返る。

「『こういう場所ができてよかった』と言っても良かった、映画を見て感動してもらえたり。とてもうれしかったです」

利 用者の大半は20〜40代で、ライブ鑑賞など「推し活」の利用も多い。ウクレレのライブやセミナーなど、観る以外の使い方を利用者から提案されることもあり、場の可能性が広がりそう。

「若い人はもちろん、シニアも懐かしい映画をきっかけに、ここに集まる。そんな『地域のエンタメ公民館』になれたらと思います」

この一軒家は最初は駄菓子屋で、新聞販売店、空き家を経て、いこまめ座になった。「エンタメ」をきっかけに再び、人が集まる場所へ…。

Pick Up



プライベートシアター内部

長時間の鑑賞でも疲れにくいリクライニングチェアが10席ある。シアターやカフェの詳細い様子、予約などは公式サイトまで。

詳しくはこちら▶

